編集後記

本研究室報告のサブ・タイトルを「技術教育学の探究」とした。それは、日本の社会の大きな変化に対応して、幼児教育から成人教育（さらに社会教育）まで見通した技術教育学研究の重要性がますます顕著になってきていると考えているからである。本報告は、２００５年１月に学部長裁量経費による研究プロジェクトとして開始された技術教育に関する国内及び国際共同研究プロジェクトの成果の一部でもある。短期間にもかかわらず、研究報告を寄せられた共同研究者の方々の貢献にここに感謝を申し上げさせていただく。小生はかねてよりコンピュータの普及とともに情報教育の問題を技術教育学においてもきちんと研究をすすめていく必要を感じていたが、本年４月中旬にアムステルダムにおいて開催された技術教育に関する国際会議(Pupils' Attitudes Toward Technology(PATT)) に参加して改めてその必要性を痛感した。その点で、最初に掲げた２本の英文研究報告を批判的に検討していただければ幸いである。共同研究者の一人であるギスリ・ソルシュテイン氏は本年３月に名古屋大学に来学され、数回にわたって、講演会等でさまざまな方と交流する機会をもつことができた。これらの英文研究報告は、８年前にはじまったアイスランドの技術教育に関する研究交流の一つの成果でもある。本誌創刊号において小生がコトリャーホフ教授の労働教育に関する論考を翻訳したこともあり、北海道大学の所先生にはコトリャーホフ教授の別の論考の翻訳を登稿していただいた。青山氏の論考は、２０数年にわたる幼児教育実践を背景に「子どもの遊びの指導」の問題に取り組み、今春高度職業人養成課程で修士論文を執筆し、その研究を発展させたものである。幼児期における遊びの問題も「技術教育学」の重要な研究課題の一つである。最後に掲載したウラ・ヨハンソン氏とマーチン・ヨハンソン氏の英文報告とその翻訳は、２００２年１２月に中京大学で開催された「スウェーデンの社会と労働」に関する研究会において両氏が報告したものを本報告書に掲載した。両氏は、ともに２００２年10月から２００３年３月まで名古屋大学教育学部に客員教授及び客員研究員として滞在され、主に小生の研究室にあったスウェーデン関係の資料を駆使して、先の研究会において報告してくださった。これらの報告はその記録として残しておきたいと考え掲載したものである。両氏に対する感謝をここに改めて述べさせていただきたい。次号（第３号）では、最初に述べた国際共同研究の成果を掲載する予定である。技術教育学の構築に向けて、忌憚のない批判を寄せていただければ幸いである。

２００５年5月１２日

技術教育学研究室
横山悦生